

## 表出方法の工夫により、コミュニケーションが拡大した 頭部外傷の一症例

○澤村 彰吾<sup>1</sup>、大坪 綾菜<sup>1</sup>、楨林 優<sup>2</sup>、森 美香<sup>2</sup>、浅野 好孝<sup>2</sup>、篠田 淳<sup>2</sup>

<sup>1</sup>木沢記念病院 総合リハビリ部、<sup>2</sup>木沢記念病院 中部療護センター

**【はじめに】** 頭部外傷で四肢麻痺を呈し、コミュニケーションに難渋する症例は少なくない。今回、手指の随意性改善に応じて表出方法を工夫することで、コミュニケーションが拡大した頭部外傷の症例を経験したので報告する。

**【症例と経過】** 本症例は頭部外傷により、四肢麻痺、遷延性意識障害を呈した23歳男性である。第241病日、当院に転院し、翌日よりリハビリテーションを開始した。リハビリテーション開始当初、両上下肢、手指に随意的な運動は認められなかった。理解は短文レベル、表出は瞬きによるYES/NO反応は可能であったが信頼性は低い状態であった。また、軽度の注意障害、前向性健忘を認めた。第330病日、右示指・中指の随意的な屈伸が可能となった。そこで、示指・中指の屈伸を質問に対する返答の表出手段とした。これにより、本人の意思を引き出すことが可能となり、看護師と連携して病棟での生活に本人の希望を取り入れることができた。第600病日、右全指の屈伸が可能となり、ボタン押しにて質問に対する返答が可能となった。また、質問に対する信頼性、反応速度も向上した。

**【考察と展望】** 他者と双方向性のコミュニケーションをとることは、QOLの向上や脳機能の賦活に繋がるとされている。本症例は、右手指の随意性改善に合わせて、表出方法を工夫し、病棟と協力してアプローチを行った。これにより、双方向性のコミュニケーションの円滑化が図られ、QOLの向上、コミュニケーションの拡大に繋がったと考えられる。今後は、更に、表出方法の質を高める為、手関節のスプリント作成やボタン押しを利用したコミュニケーションエイドの導入も検討している。